

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02689

研究課題名（和文）天草諸方言の形態音韻現象に関する基礎的研究 方言類型論の構築を目指して

研究課題名（英文）Basic research on morpho-phonological phenomena in Amakusa dialects of Japanese: Towards construction of dialectal typology

研究代表者

松浦 年男（Matsuura, Toshio）

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：80526690

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は天草諸島の諸方言を対象に音韻論、形態論の現象の記述と、類型論の構築を目指した。コロナ禍により現地調査が困難になったため個別方言の記述が中心となった部分はあるが、次の成果が得られた。(1) 深海方言の漢語語彙で有声障害重子音が規則的に観察された。(2) 複合名詞でのアクセント型対立の中和に南北差が見られ、北部方言においてのみ観察された。(3) 本渡方言の呼びかけイントネーションに2種類あり、目の前にいるときの呼びかけではアクセント型の対立の中和が見られた。(4) 本渡方言において不定語を含む文でアクセント型の対立の中和が観察された。(5) ELANによる言語資料管理の方法論を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は以下のようにまとめられる。(1) 音調型の面から北と南に分けられるという従来の観察が、複合名詞のアクセントの振る舞いからも支持された。このように南北で分かれる理由を文化や考古学など他の分野からも考察することで、同地域の歴史的な人の流れの変化などが分かるだろう。(2) アクセント型の中和が文単位のイントネーションにおいて見られた。これは他の言語も視野に入れたイントネーションレベルの類型論の構築の必要性を支持するもので、日本語から言語一般への示唆を含んでいる。(3) 多様な方言資料を電子的に効率よく管理する方法の知見が得られた。これは、言語研究の方法論一般へ貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to describe the phonological and morphological phenomena in dialects of the Amakusa Islands, with the ultimate goal of formulating a dialectal typology. Due to COVID-19-related difficulties in fieldwork, we shifted in focus towards examining individual dialects. Despite these challenges, the study yielded several findings: (1) Voiced obstruent geminates consistently found in the Sino-Japanese words in the Fukami dialect. (2) An intriguing discrepancy was noted in the neutralization of accent types in compound nouns, predominantly occurring only within Northern dialects. (3) In the Hondo dialect, two distinct types of calling intonations were identified, with accent type neutralization evident when addressing someone nearby. (4) The Hondo dialect also revealed instances of accent type neutralization in sentences comprising indefinites. (5) The study successfully devised a methodology for managing linguistic data, utilizing the ELAN software.

研究分野：音韻論，音声学

キーワード：音韻論 形態論 イントネーション 重子音 ELAN 天草方言

## 1. 研究開始当初の背景

天草諸島は行政区画上、熊本県天草市、上天草市、(天草郡)苓北町、鹿児島県長島町に属する20あまりの島からなる。方言区画論では、これらの島々は熊本方言の中の熊本南部方言の1つとして分類される。もともと、アクセント現象の面から、天草諸島は牛深を中心とした南部と、本渡を中心とした北部に二分する必要があることが明らかになっていた(上村1972)。

しかし、動詞や数詞+助数詞に見られる形態音韻現象を見ると、北部・南部よりさらに細かな分類も必要であることが分かる。動詞に関しては「テ形」やr語幹動詞に見られる交替現象を挙げることができる。テ形とは「書いてきた」や「読んできた」といった形式におけるテに相当する部分である。九州西部ではテ形に様々なパターンがあることが知られている。このうちw語幹(買う)、m語幹(読む)、e語幹(出る)について見てみると、表1に示したとおり、北部(本渡)と南部(牛深)で重子音(促音)の出現が異なる(例えば本渡では「買って来た」はコッキタと促音になる)だけでなく、北部の中でも本渡と大江で異なった分布を示している(有元2007)。

同様に、r語幹の動詞(例:/hur-/降る、/ar-/有る)+推量表現/doo/を見ても、本渡ではフドー、アドーのように有声阻害重子音(dd)が現れるが、深海ではフィドー、アイドーと促音が現れることがない。このr語幹の動詞における有声阻害重子音は複合動詞(例:売り出し ウッダシ)にも見られ、生産性の高さを窺わせる(松浦2016)。さらに、代表者が予備的な調査を行ったところ、数詞+助数詞の実現形について、深海では一秒をイッピョー、六号をロッゴーというように、有声阻害重子音(bb,gg)が現れたが、北部の本渡や、同じ南部でも牛深では観察されなかった。

このように、形態音韻現象の分布について見ていくことによって、天草諸島の方言がいかにか多様性に富むかが分かる。これまで真田(編)(2002)のように天草諸島を対象にした記述研究はいくつか行われており、それらを見ることによって上述した動詞の形態音韻現象についてある程度知ることできる。しかし、これらは特定の現象や標準語との対照に重点を置いた、部分的な記述にとどまっている。そのためある現象がどの程度規則的なものか、天草諸島の中でどの程度一般的に見られるものなのか、分布に含意関係などを見いだせるのかなどといった疑問に答えることはできない。

## 2. 研究の目的

以上のような状況を打破するためには、天草諸方言の各方言を対象にした総合的な記述が必要となる。そこで本研究では、天草諸方言のうち重要と思われる本渡、深海、牛深を主なターゲットにして音韻論、形態論の現象を中心とした包括的な記述研究を行った。そして、音素体系や形態音韻規則の適用範囲を検討することで、形態音韻論的な観点から天草諸島の方言類型論の構築を目論んだ。

## 3. 研究の方法

研究は主に現地調査によって得られた一次資料に基づいて行われた。調査では面接調査(elicitation)を行うほか、自然談話資料を収集した。調査項目は、有声性の交替、重子音(促音)と単子音の交替、アクセント、イントネーションなど広い範囲にわたっている。また、この他に文法スケッチにおいて必要となる事項を一部であるが調査した。

## 4. 研究成果

本研究を通して分節音、アクセント、イントネーション、言語資料管理など多岐にわたる分野で成果を出すことができた。ただし、コロナ禍により調査が中断されたため、類型論の提案まで至っていないところがある。以下では個別分野の成果をまとめているが、このことに留意されたい。

### (1)漢語の音韻論

深海方言における漢語及び数詞に見られる重子音に焦点を当てて音韻分析を行った。標準語において漢語や数詞は有声阻害重子音を許容しないのに対して深海方言ではそれらを許容する。本研究では母語話者に対する聞き取り調査を実施し、有声阻害重子音が生産的に表れることを示した。分布を以下にまとめる。

- a. /k/末尾の直後に/k/、/g/が来る場合、後続子音の重子音になる。  
例: kokkoo(国交), koggo(国語), gagge(kai)(学芸(会)), cf. kokudoo, \*koddoo(国道)
- b. /t/末尾の直後に無声子音が来る場合、後続子音の重子音になる。  
例: happjoo(発表), ikkai(一回), cf. nitibei(日米)
- c. /t/末尾の直後に/d/、/z/が来る場合、後続子音の重子音になる。ただし、/z/が来る場合には例外が見られる。  
例: kwaddoo(活動), iddo(一度), cf. itibjoo, \*ibbjoo(一秒), bezzin~betsuzin(別人), sjuzzjoo~sjutuzjoo(出場)

この分布に対して調和文法を用いた分析を示した。具体的には、標準語と深海方言の違いは有声阻害重子音を禁じる制約の重み付けに還元され、標準語ではこの制約の重み付けが大きいのに対し、深海方言では単独での重み付けが小さいと同時に、[COR]の値の入出力間での同一性を求める制約と重複して違反すると、母音挿入を禁止する制約よりも調和の点数が低くなるという重み付けを提案した。以下に分析の適用例を示す。

深海方言の /n/ 末尾における有声阻害重子音と母音挿入

		ALIGN-R 3	NoDDNF 2	IDENT-[COR] 2	H-score
/nit-koo/ 日光	→ nik.koo			-1	-2
	ni.t]i.koo	-1			-3
/tet-doo/ 鉄道	→ ted.doo		-1		-2
	te.t]u.doo	-1			-3
/tet-boo/ 鉄棒	teb.boo		-1	-1	-4
	→ te.t]u.boo	-1			-3

深海方言の /k/ 末尾における有声阻害重子音と母音挿入

		IDENT-[DOR] 4	ALIGN-R 3	NoDDNF 2	H-score
/gak-koo/ 学校	→ gak.koo				0
	ga.k]u.koo		-1		-1
/kok-go/ 国語	→ kog.go			-1	-2
	ko.k]u.go		-1		-3
/kok-doo/ 国道	kod.doo	-1		-1	-6
	→ ko.k]u.doo		-1		-3

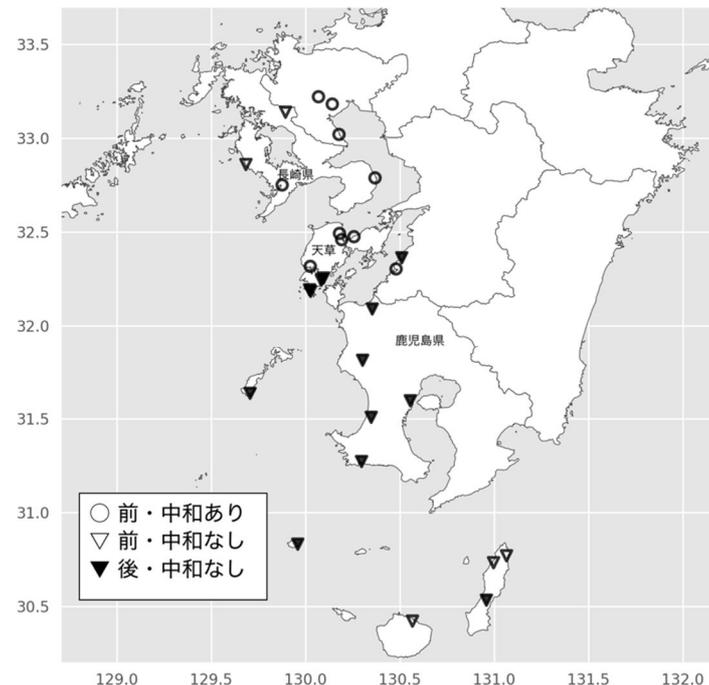
この分析は入力において子音の調音位置の指定を求めるもので、不完全指定が適切ではないことを含意している。

## (2) 複合名詞のアクセント

天草諸方言のアクセントは下降を含む A 型と下降を含まない B 型が対立する。天草諸方言と同じく長崎方言でも A 型と B 型という対立があるが、長崎方言では前部要素が長い場合にアクセントの対立が中和する(松浦 2014)。この中和現象は鹿児島方言では見られない一方、長崎と鹿児島の間とも言える天草については、本渡方言において中和現象が見られることが木部(2012)によって指摘されている。しかし、天草諸方言全体での分布は不明である。特に南部の方言は鹿児島方言的な要素を含むことから、通方言的な調査が必要なことが分かる。そこで本研究では 8 地点にて複合名詞のアクセントの調査を実施した。

まず、北部と南部で見られた音調型の違いを整理する。北部諸方言(今富、本渡、佐伊津、大島子)では A 型は第 2 モーラ(韻律語が 2 モーラの場合は第 1 モーラ)にピークが固定されていた。それに対して南部諸方言(深海、浅海、牛深、下須島)では A 型のピークの位置は、第 2 モーラに見られることが多いが、固定されないという特徴が見られた。

次に、複合名詞の中和現象について報告する。北部ではアクセントの中和現象が一貫して観察された。それに対して南部では中和する割合が低くなった。話者間の差も大きいがおおむね 10% 以下となるが多かった。これは、音調型が鹿児島に近い南部地域では中和に関して鹿児島方言の持つ特徴を共有していると言える。先行研究の報告も含めた結果を下にまとめる。

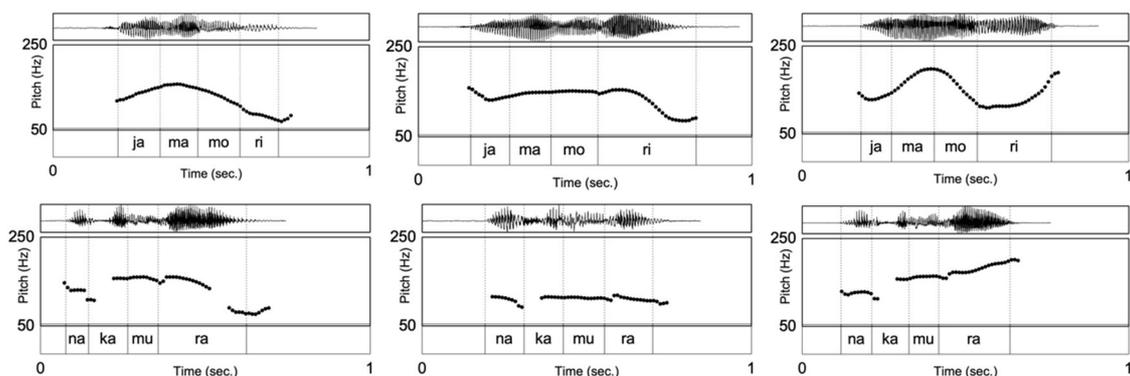


はとみに下がり目を前から数えるという特徴を持ち、は下がり目を後ろから数えるという特徴を持つ。本稿の調査から、少なくとも北部は や、南部は が分布することが分かった。

## (3) 呼びかけイントネーション

本渡方言における呼びかけイントネーションの記述的一般化を行い、自律分節音韻論による

分析を提示した。本渡方言の呼びかけイントネーションは呼びかける相手が目の前にいるかいないのかによって形が変わる。目の前にいるときは A 型と B 型の対立は中和する。それに対して、目の前にいないときは対立が保持される点が特徴的である。4 モーラの  $f_0$  を次に示す（上が A 型「山森」、下が B 型「中村」。左から言い切り、目の前にいるとき、目の前にいないとき）。



本研究では自律分節表示として、トーンの種類と結合する単位が異なるという分析を提示した。提案した自律分節表示を以下に示す。

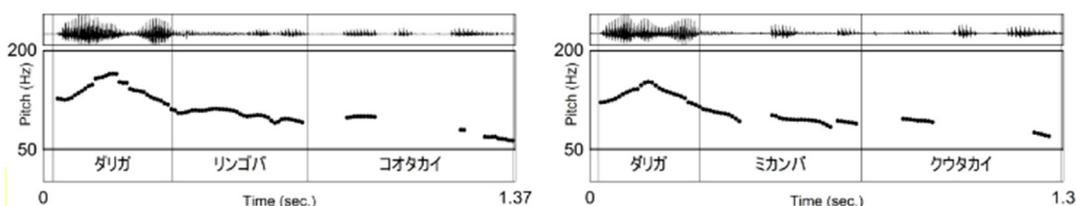
本渡方言の自律分節表示 ( $\widehat{HL}\%$ , H% は呼びかけの持つ高音調)

	A 型	B 型
言い切り	ナオヤ	ナオミ
	L H L	L H
呼びかけ 現前形	ナオヤー	ナオミー
	L $\widehat{HL}\%$	L $\widehat{HL}\%$
呼びかけ 不在形	ナオヤー	ナオミー
	L H L H%	L H H%

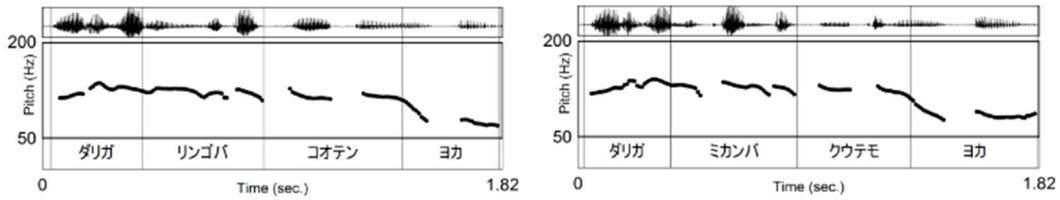
#### (4) 不定語の音調と不定語を含む句・節の音調

不定語（「誰」「何」など）のイントネーションは諸方言で少し特異な振る舞いを見せる。本研究では本渡方言の不定語のイントネーションを記述した。その結果、次のことが分かった。

まず、不定語が疑問詞として用いられる疑問詞疑問文において、疑問詞より後ろではピッチレンジが低く押さえ込まれた。以下に a. ダリガ リンゴバ コオタカイ（誰がリンゴを食べたか）、b. ダリガ ミカンバ クウタカイ（誰がミカンを食べたか）の例を示す。



次に、A 型と B 型というアクセント型の対立が中和し、平らなピッチが広がるという現象が観察された。以下に a. ダリガ リンゴバ コオテン ヨカ（誰がリンゴを買ってもよい）、b. ダリガ ミカンバ クウテモ ヨカ（誰がミカンを食べてもよい）の例を示す。ポイントは a のリンゴ、コオテンは単独発話ではリンゴ、コオテンのように下がり目があるのに対して、不定語の後では下がり目がなくなることである。



このような高いピッチの拡張は、様々な方言で観察される。本研究ではそれらの結果を統合して次のようにまとめた。

方言	アクセント体系	不定語アクセント：対立の有無	不定語イントネーション：アクセントの消失		
			φ節	カ節	モ節
福岡市	ピッチ	無し	✓	✓	✓
長崎市	語声調				✓
天草市	語声調				✓
東京	消失型 非消失型		ピッチ		
南さつま市	語声調	有り			
田名部	ピッチ				

この表から、不定語のイントネーションとしてアクセントの消失が見られるのは、不定語のアクセントに対立がない方言に限られるという含意関係が成り立つことが分かる。

#### (5) 言語資料の管理方法に関する提案

言語調査により得られたデータの管理は非常に難しいが、汎用的なソフトウェアやファイル形式による管理は求められるところである。本研究では注釈付けソフトウェアとして大きなシェアを持つ ELAN により言語データを適切に管理する方法を提案した。そして講習会を通してこの手法の普及に努めた。ELAN には Lexicon と呼ばれる xml 形式の辞書がある。本研究により牛深方言に対応した Lexicon を作成することができた。

#### < 引用文献 >

- 上村 孝二 (1972) 「天草島方言のアクセント」『文学科論集』鹿児島大学
- 有元 光彦 (2007) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房
- 松浦 年男 (2016) 「天草諸方言における有声促音の音韻論的・音声学的記述」『国立国語研究所論集』
- 真田 信治 (2002) 『消滅に瀕した方言文法の記録：天草方言・由利方言』科研費報告書
- 松浦 年男 (2014) 『長崎方言からみた語声調の構造』ひつじ書房

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 黒木 邦彦	4. 巻 116, 117
2. 論文標題 日本語動詞の可変部を語幹構成要素と見做すことの妥当性: 語幹聲調の位置から導き出される語幹領域	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語文	6. 最初と最後の頁 44--57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 天草市本渡方言のアクセント資料(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部 北星論集	6. 最初と最後の頁 93~101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦 年男	4. 巻 158
2. 論文標題 天草市深海方言の漢語に見られる有声阻害重子音	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 29~61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11435/gengo.158.0_29	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 天草市本渡方言のアクセント資料(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部 北星論集	6. 最初と最後の頁 29~42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 天草市本渡方言のアクセント資料(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部 北星論集	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 山形県村山方言における声帯振動率の分布	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 141-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24467/onseikenkyu.22.2_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 55(1)
2. 論文標題 佐賀県北方町方言の外来語アクセントおよび音声実現に関する予備調査報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部北星論集	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 55(2)
2. 論文標題 山形県村山方言における有声促音の音声実現に関する予備的分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部北星論集	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 松浦年男
2. 発表標題 (趣旨説明)「九州方言音調の研究」のこれまでとこれから
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤久美子
2. 発表標題 不定語と不定語を含む句・節における音調の実現について -西南部九州二型アクセント方言の対照-
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤久美子
2. 発表標題 (趣旨説明)日琉諸語の疑問・不定表現をめぐる韻律的現象：類型論的枠組みの提案と通時的考察
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤久美子
2. 発表標題 日琉諸語の疑問・不定表現における韻律的現象の類型化の提案
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤久美子
2. 発表標題 日本語諸方言における不定語音調の類型化の試み
3. 学会等名 関西音韻論研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高城 隆一、黒木 邦彦
2. 発表標題 音調的語と形態統語的語との齟齬：鹿児島県中西部方言の事例から
3. 学会等名 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒木 邦彦
2. 発表標題 ELANだけで言語資料を管理：自動註釋や音聲付き辭書を實現させつゝ
3. 学会等名 土曜ことばの会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 コーパスの活用例 何が有声促音になるのか？ COJADSを用いた分類の試み
3. 学会等名 Covid-19の影響下における方言研究のあり方を模索するワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 九州諸方言の与格助詞に見られる音韻交替
3. 学会等名 国立国語研究所プロソディー研究班オンライン研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 研究事例紹介 多様な資料を用いた実証研究
3. 学会等名 Covid-19の影響下における方言研究のあり方を模索するワークショップ 第二弾（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松浦年男
2. 発表標題 天草市本渡方言における呼びかけのイントネーション
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤久美子
2. 発表標題 茨城県高萩市方言における不定語を含む文の音調特徴
3. 学会等名 国立国語研究所プロソディー研究班オンライン研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 福岡方言における音韻句の形成要因の比較
3. 学会等名 日本言語学会 第158回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUURA Toshio
2. 発表標題 Weak but continuous geminate voicing in Yamagata Japanese
3. 学会等名 International Congress of Phonetic Sciences 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 日本語諸方言における有声促音の類型論に向けて
3. 学会等名 札幌学院大学言語学談話会第100回記念会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦 年男
2. 発表標題 天草地方の方言類型論を目指して
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 4
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒木 邦彦
2. 発表標題 ふぞろいの単語たち: 上甌島瀬上方言の表層語形を左右する3種類の処理単位
3. 学会等名 日本言語学会 第159回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUURA Toshio
2. 発表標題 Phonology of voiced geminates in Amakusa Japanese
3. 学会等名 NINJAL ICPP 2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kumiko Sato
2. 発表標題 Intonational patterns of [WH...C[+wh]] structures: Dialectal variation in Japanese
3. 学会等名 NINJAL ICPP 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kuroki, Kunihiro
2. 発表標題 The syllable structure of the Northern Satsuma dialect of Japanese
3. 学会等名 Linguistics and Asian Languages 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦年男
2. 発表標題 イット(一度)にロッゴ(六合)? 語根融合における音韻制限の多様性
3. 学会等名 日本言語学会第154回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松浦 年男・安永 大地・水本 豪
2. 発表標題 ERPによる複合語アクセントの研究:現状と課題
3. 学会等名 日本音声学会第31回全国大会ワークショップ「プロソディ研究のための方法論」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 MATSUURA, Toshio
2. 発表標題 Towards a typology of compound and loanword prosody in tonal dialects of Kyushu Japanese
3. 学会等名 Workshop on 'Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean' (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 KUROKI, Kunihiro
2. 発表標題 The meaning of past tense in Japanese and Korean
3. 学会等名 Linguistics and Asian Language 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 松浦 年男	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 152
3. 書名 自由研究 ようこそ！ことばの実験室（コトラボ）へ	

1. 著者名 窪園 晴夫、守本 真帆（松浦年男ほか，分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 プロソディー研究の新展開	

1. 著者名 窪園 晴夫、守本 真帆（佐藤久美子ほか，分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 プロソディー研究の新展開	

1. 著者名 筑紫日本語研究会（松浦年男ほか，分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

1. 著者名 木部 暢子(編), 松浦年男ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 192
3. 書名 明解方言学辞典	

1. 著者名 佐藤久美子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創想社	5. 総ページ数 318
3. 書名 坂口至教授退職記念日本語論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>研究プロジェクト・ウェブページ  <a href="https://researchmap.jp/yearman/kaken2017">https://researchmap.jp/yearman/kaken2017</a>          串木野方言辞書  <a href="https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/250776/91fdcf194f172758b9844057b42a0bf6?frame_id=671207">https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/250776/91fdcf194f172758b9844057b42a0bf6?frame_id=671207</a>          ELAN関連資料  <a href="https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/250776/5b514f55c51eea4992faaf1f8a8b5c1b?frame_id=671207">https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/250776/5b514f55c51eea4992faaf1f8a8b5c1b?frame_id=671207</a>          日本語諸変種における用言の語形  <a href="https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/98101/303c8d06fd5822b763acd59c4b67678c?frame_id=669644">https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/98101/303c8d06fd5822b763acd59c4b67678c?frame_id=669644</a>          言語注釈用の記号体系  <a href="https://docs.google.com/spreadsheets/d/1fAEm2sToqkYIEWKQmOyV1LlIF5yNDSv60LpYJk5NvQk/edit#gid=1073523111">https://docs.google.com/spreadsheets/d/1fAEm2sToqkYIEWKQmOyV1LlIF5yNDSv60LpYJk5NvQk/edit#gid=1073523111</a></p>
---

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	黒木 邦彦  (Kuroki Kunihiko)  (80613380)	神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授   (34513)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 久美子  (Sato Kumiko)  (60616291)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・プロジェクト非常勤研究員    (62618)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山田 高明  (Yamada Takaaki)  (10981285)	有明工業高等専門学校・一般教育科・助教    (57102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関